

石黒吉次郎教授を送る辞

王 伸子

石黒吉次郎先生は、一九七〇年、東京大学文学部国語国文学科をご卒業になり、同大学院人文科学研究科国語国文学専修、同博士課程を経て、東京大学文学部国文学研究室助手を務められた後、一九七五年、専修大学文学部国文学科の専任講師として入職なさいました。一九七九年に助教、一九八五年に教授に昇格され、今日まで、四十二年間に渡って専修大学の教育にご尽力なさいました。

先生は、中世文学、中世の芸能、演劇等について多くの研究業績を残され、というよりも現在でもご研究を続けておられ、啓蒙的な一般書だけでなく、多くの研究論文を執筆されていらつしやいます。先生とは、専修大学で二十五年ほどご一緒したことになりますが、四十二年という年月の長さがいかに長く貴重な時間であったかと言ふことを、今、あらためて感じております。先生のご研究については、主要業績一覧をご覧になれば多くのことがお分かりになるかと思ひますので、ここでは今までの石黒先生との思い出をいくつかお話ししたいと思います。

先生とは、ある年、香港で開かれた日本語国際シンポジウムという学会でご一緒し、数人の先生方とお食事や歓談をする機会を得ました。その折、先生からご研究のことやご家族のお話などをうかがい、穏やかに楽しそうにお話になる様子に触れ、先生の優しいお人柄がわかりました。

それから数年して、私の友人であるカナダのカルガリー大学の楊曉捷教授が学生の引率で本学を訪問したときのこと、ぼつりと、「自分の研究分野で、私が敬愛し尊敬する教授が専修大学にいらつしやるのだが、前回の訪問ではお

会える機会もなく、残念だった……できれば一度でよいからお会いしてご挨拶したい」と漏らされ、聞けばそれが石黒先生であるとのこと。私が存じ上げていると話すと、是非とも紹介してほしいということで、石黒先生の研究室にお連れしました。それからお二人で急速に話は進んだようで、それを機会に日文とカルガリー大学の交流も始まり、コンピュータに明るい石黒先生とカルガリー大学との間で、ネットを介しての授業も始められました。楊暁捷教授が、何度も力強く、石黒先生のご研究は本当にすばらしい、いつもいつも論文を拜見してそのご研究に励まされていたと生き生きと話す姿が印象的でした。

また、先生の業績一覽を拜見していて思い出したこともあります。先生は、神社の歴史や伝説もご研究になっていますが、先生から、懇意になさっている神社をご紹介いただき、留学生にお正月の巫女さんの体験をさせていただいたことがあります。神社の方々にはそれはそれはよくしていただいたようで、先生のお人柄をそこでもうかがうことができました。

先生はお優しいだけでなく、物事をきちんと見据えて、的確なご助言をくださったこともありました。先生から教えていただきたいことはまだまだありますし、また、これからもご研究をお続けになることを心から期待しております。専修大学のキャンパスを去られるにあたって惜別の意を十分に述べ尽くすことはできませんが、日本語日本文学文化学会を代表し、感謝の気持ちを込めて送別の辞とさせていただきます。